

# 大豆品種「里のほほえみ」の栽培技術

福島県農業総合センター 作物園芸部畑作科

部門名 普通畑作物—大豆—作型・栽培型

担当者 河村郁恵・木田義信・安田裕基子

## I 新技術の解説

### 1 要旨

大豆品種「里のほほえみ」の標播(6月上旬播種)で多収とするには、栽植密度は畦間70cm、株間15~20cm、1株2粒播きが適する。開花期の総節数330節/m<sup>2</sup>以上、成熟期の稔実莢数600莢/m<sup>2</sup>以上、粗子実重35kg/aを目標とする。

- (1) 粗子実重35kg/aを確保するには、稔実莢数600莢/m<sup>2</sup>以上が必要となる(図1)。600莢/m<sup>2</sup>以上となる莢数を確保するには、株間は10~20cm(図3)である。
- (2) 稔実莢数600莢/m<sup>2</sup>を確保できる開花期のm<sup>2</sup>当たりの総節数は、330節以上である(図2)。開花期のm<sup>2</sup>当たりの総節数330節以上を確保できるのは、株間10~20cmである(図3)。
- (3) 株間が狭いと、10cm区で子実の百粒重が小さくなる(図4)。
- (4) 品質は、株間による差はない。
- (5) 株間が広いほど最下着莢高が低くなるので収穫ロスが増えることがある。以上から、株間は15~20cmが適する(データ省略)。
- (6) 機械収穫に適する茎水分50%以下となる剥皮指数は、0.6以下である(図5)。

### 2 期待される効果

- (1) 新たに「里のほほえみ」栽培に取り組む生産者の栽培指標となる。

### 3 適用範囲

県内大豆生産者

### 4 普及上の留意点

- (1) 大粒品種なので、播種機を粒大に合わせた設定にし、また、重さでなく粒数で播種量を決めるなど、確実に必要量を播くようにする。
- (2) 良好な出芽・初期生育を確保するために、明渠や暗渠等の排水対策を徹底する。
- (3) 病虫害防除を適期に実施し、収量を確保する。
- (4) 倒伏軽減のため、培土を励行する。
- (5) 剥皮指数とは、大豆の地際部から主茎の表皮を指の爪で剥くことのできる最上位までの高さの主茎長との比である。

## II 具体的データ等

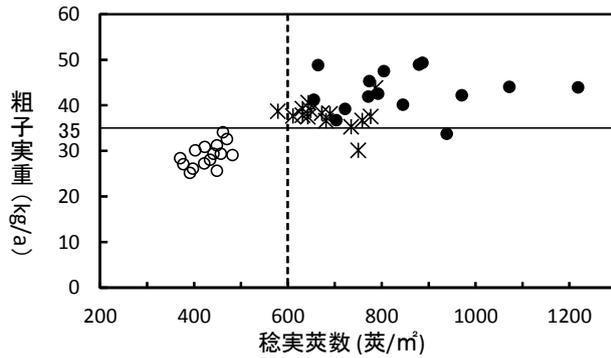


図1 m<sup>2</sup>当たり穂実莢数と粗子実重  
(2016～2018年)

注) ○ 2016年 ● 2017年 \* 2018年  
播種期: 2016年6月3日、2017年6月6日、2018年6月5日  
株間70cm、2本仕立

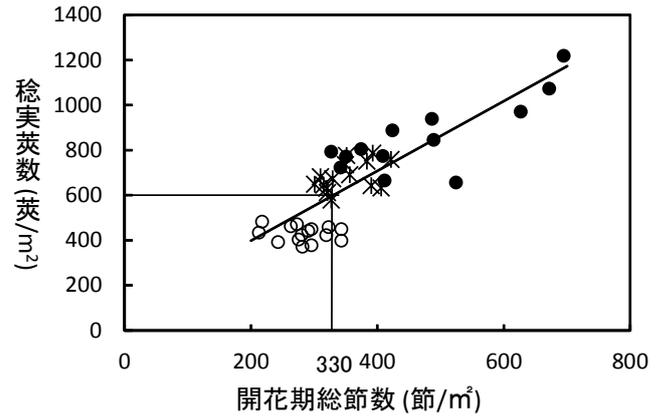


図2 開花期の総節数と穂実莢数  
(2016～2018年)

注) ○ 2016年 ● 2017年 \* 2018年

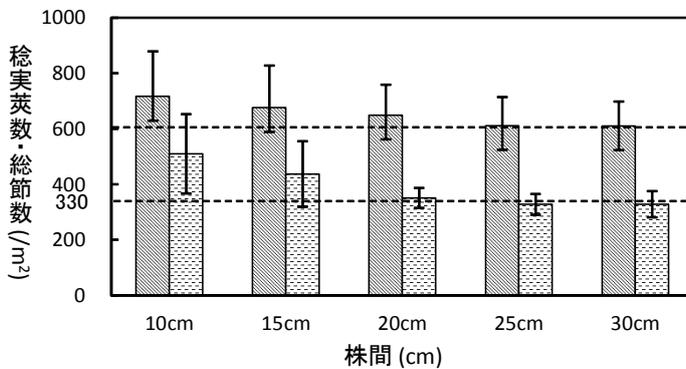


図3 株間と穂実莢数、開花期総節数(3カ年平均)

■ 穂実莢数 □ 総節数

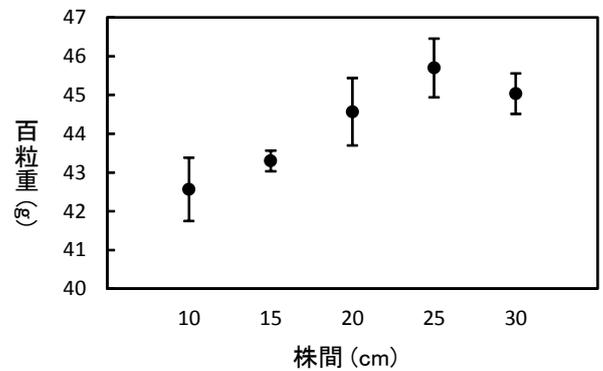


図4 株間と百粒重(2017年)

注) ● 平均±標準誤差

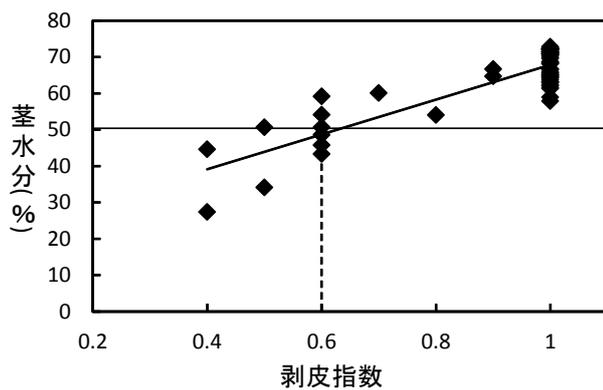


図5 茎の剥皮指数と茎水分  
(2018年)

## III その他

### 1 執筆者

河村郁恵

### 2 成果を得た課題名

- (1) 研究期間 平成28年度～30年度
- (2) 研究課題名 奨励品種決定調査

### 3 主な参考文献・資料

- (1) 平成29年度参考となる成果「大豆品種「里のほほえみ」の最適株間」